

道徳教育における「情報モラル」について

— 小型情報機器の功罪 —

井ノ口 哲 也

一、はじめに

本稿は、小学校・中学校の道徳教育における情報モラルについて、学習指導要領での指示内容から、中学校の道徳教育の延長線上に位置する高等学校の「倫理」の教科書での情報モラルの取り扱い、果ては新聞が報じてきた青少年の情報モラルまでを視野に入れたうえで、特に小学生・中学生の小型情報機器の使用状況を軸に、考察するものである。

小型情報機器が身の回りにあふれ、大人がそれを使用しているのを見て幼少期の子どもがそれに触れ、やがて成長して徐々に自らもそれを使用することが当たり前ようになってきている今日の状況のなかで、小学校・中学校の道徳教育では、情報モラルについて、何をどのように教えることになっているのか。本稿では、それを確認し、高校「倫理」の情報社会に関する記述や、青少年のスマホ使用に関する新聞記事を紹介したうえで、これらの情報を小中学校の授業にも適切にフィードバックすることの必要性をうたえたいと考えている。

二、小・中学校の学習指導要領の「道徳」と『解説 道徳編』

ここでは、小・中学校の学習指導要領の「道徳」と、その解説書を取りあげて、情報モラルの該当箇所を確認しておきたい。

まず、『小学校学習指導要領』の「第3章 道徳」と、その解説である『小学校学習指導要領解説 道徳編』（著作権所有：文部科学省、東洋館出版社、2008年8月。以下、『解説 道徳編』と略記）における情報モラルに関する記述を示す。実は、『中学校学習指導要領』の「第3章 道徳」と、その解説である『中学校学習指導要

領解説 道徳編』（著作権所有：文部科学省、日本文教出版、2008年9月）における情報モラルに関する記述も、小学校のものと、ほぼ同じである。以下では、小学校のものを示した後で、中学校のものと記述の違いを述べるにとどめる。

さて、『小学校学習指導要領』の「第3章 道徳」において、情報モラルは、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の3で、以下のとおり言及される。

3 道徳の時間における指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(5) 児童の発達の段階や特性等を考慮し、第2に示す道徳の内容との関連を踏まえ、情報モラルに関する指導に留意すること。

中学校のものは、「児童」が「生徒」になり、「踏まえ」が「踏まえて」になっている以外は、同じ文言である。すなわち、小学校のものも中学校のものも、言おうとしていること自体に差異は無い。ここに見える「第2 内容」とは、小学校1・2年生、小学校3・4年生、小学校5・6年生、そして中学生のそれぞれで、「1 主として自分自身に関すること。」「2 主として他の人とのかかわりに関すること。」「3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。」「4 主として集団や社会のかかわりに関すること。」という四つの柱から構成される具体的な道徳的行為を指す。しかし、上引の文言のみでは、「第2 内容」との関連を踏まえ、情報モラルに関する指導に留意せよ、と言われたところで、何をどうすればよいのか、困惑することになるであろう。

そこで、『解説 道徳編』を参照すると、上引の文言について、情報モラルの定義を含めて、やや具体的な記述が見られる。「第5章 道徳の時間の指導」―「第4節 道徳の時間の指導における配慮とその充実」―「5 情報モラルの問題に留意した指導」には、次のように記されている。

社会の情報化が進展し、コンピュータや携帯電話等が普及することにより、情報の収集や表現、発信などが容易にできるようになったが、その一方で、情報化の影の部分が深刻な社会問題になっている。児童は、学年が上がるにつれて、次第にそれらを日常的に用いる環境の中に入っており、学校や児童

の実態に応じた対応が学校教育の中で求められる。これらは、学校の教育活動全体で取り組むべきものであるが、道徳の時間においても同様に、情報モラルに関する指導に配慮していかなくてはならない。

(1) 情報モラルと道徳の内容

情報モラルとは情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度ととらえることができ、その内容としては、個人情報保護、人権侵害、著作権等に対する対応、危険回避やネットワーク上のルール、マナーなどが一般に指摘されている。

道徳の時間においては、第2に示す道徳の内容との関連を踏まえて、例えば、情報モラルに関する題材を生かしたり、情報機器のある環境を生かしたりするなどして指導に留意することが求められる。道徳の内容との関連を考えると、例えば、ネット上の書き込みのすれ違いなど他者への思いやりや礼儀の問題及び友人関係の問題、情報を生かすときの法やきまりの遵守に伴う問題など、多岐にわたっている。特に、情報機器を使用する際には、自分のことを明らかにしなくとも情報のやりとりができるという匿名性に伴って、使い方によっては相手を傷付けるなど、人間関係に負の影響を及ぼすこともある。小学生の段階も少しずつそのような環境の中に入っていく時期であることを押さえて指導上の配慮をしていく必要がある。

各学校においては、児童や地域の実態等を踏まえ、指導に際して配慮すべき内容について検討していくことが必要である。

(2) 情報モラルへの配慮と道徳の時間

情報モラルに関する指導について、道徳の時間では、その特質を生かした指導の中での配慮が求められる。

指導に際しては、情報モラルにかかわる題材を生かして話し合いを深めたり、コンピュータによる疑似体験を授業の一部に取り入れたり、児童の生活体験の中の情報モラルにかかわる体験を想起させたりする工夫などが考えられる。創意ある多様な工夫が生み出されることが期待される。

具体的には、例えば、相手の顔が見えないメールと顔を合わせての会話との違いを理解し、メールなどが相手に与える影響について考えるなど、イン

ターネット等に起因する心のすれ違いなどを題材とした指導が考えられる。また、ネット上の法やきまりを守れずに引き起こされた出来事などを題材として授業を進めることも考えられる。その際、その問題の根底にある他者への共感や思いやり、法やきまりのもつ意味などについて児童が考えを深めることができるように働き掛けることが重要になる。

なお、道德の時間は、道德的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深めることを通して道德的实践力を育成する時間であるとの特質を踏まえ、例えば、情報機器の使い方やインターネットの操作、危険回避の方法やその際の行動の具体的な練習を行うことにその主眼をおくのではないことに留意する必要がある。

(97 頁～98 頁)

中学校の『解説 道德編』は、「児童」が「生徒」になり、また「児童は、学年が上がるにつれて、次第にそれらを日常的に用いる環境の中に入っており、」が「生徒は、それらを日常的に用いる環境の中に入っており、」になり、そして「小学生の段階も少しずつそのような環境の中に入っていく時期であることを押さえて指導上の配慮をしていく必要がある。」という一文が無いこと以外は、これと同じ文言である。すなわち、小学生に対しては徐々に情報機器を使用していることを前提としているが、中学生に対しては全員が日常的に情報機器を使用する環境にいることを前提とした記述になっている。

これによると、情報モラルとは、「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」とされる。具体的には、個人情報の保護、人権侵害、著作権等に対する対応、危険回避やネットワーク上のルール、マナーなどが挙げられている。このうち、情報機器の使い始めのうちに取り組むべきことは、やはりルールやマナーの教育であろう。モラルは、こうした基本的なことを教えることから、育まれるからである。その先に、個人情報の保護、人権侵害、著作権などへの対応が可能となっていくであろう。

そして、最後の段落の記述からは、学校現場は、情報機器のノウハウを教え込む所ではなく、あくまでもモラルを培う所である、と読み取ることができる。この点は、筆者も強く同意するものである。

三、『わたしたちの道徳 小学校3・4年』

道徳の授業は小学校1年生から開始されるが、情報モラルに関する記述が道徳の副読本に現われてくるのは、『わたしたちの道徳 小学校3・4年』（著作権所有：文部科学省、教育出版、2014年6月）が最初である（すなわち『わたしたちの道徳 小学校1・2年』（著作権所有：文部科学省、文溪堂、2014年6月）に情報モラルに関する記述は見当たらない）。

同書170頁～173頁の計4ページには、「じょうほうモラル コンピュータやけい帯電話などをどのように使えばよいのでしょうか」という見出しのもと、各頁、次のように記されている。

コンピュータやけい帯電話などのじょうほう機器は、とても便利です。いろいろなことを調べたり、かん単に友達とメールで話したりすることができます。

けれども、使う場面や使い方をよく考えないと、あぶない目にあったり、こまったりすることがあります。（以上、170頁）

ゲームが大好きなまさお君は、オンラインゲームで友達とよくゲームをしています。

時々、宿題が後回しになってしまうことや、約束を守れないこともあります。

つい、おそくまでゲームをして、よく朝、起きられなくなることもあります。

○このような生活を続けていると、やがてどのような問題が起こるでしょうか。

○これからは、どのようなことに気をつけなければならないでしょうか。

（以上、171頁）

ゆみさんの家に電話がかかってきました。

「よい参考書があるので、たくさんの人にしょうかいしたいと思います。」

友達の名前と電話番号を教えてくださいませんか。」

ゆみさんは、どうすればよいのかと思いました。

○もし教えてしまったら、どのようなことになると思いますか。

○このようなとき、どのようにすればよいのでしょうか。（以上、172 頁）

りょうたくんのけい帯電話に、知らない人からメールがとどきました。

「プレゼントが当たったのでおとどけます。住所と名前とたん生日を入力して、返信してください。」

りょうたくんは、喜んで入力しようとしたのですが、（あれ、いいのかな。）
と思ってじっと考えました。

○もし入力してしまったら、どのようなことになると思いますか。

○このようなとき、どのようにすればよいのでしょうか。（以上、173 頁）

これらは、具体的な個々の事例について、どのように判断すべきかを児童一人ひとりに考えさせるものとなっている。まず一人で考えさせたうえで、クラスの中で話し合わせることによって、何が善くて何が悪いかというモラルを共有し、自己を防御する力を養うことができる、と思われる。

四、『私たちの道徳 小学校 5・6 年』

『私たちの道徳 小学校 5・6 年』（著作権所有：文部科学省、廣済堂あかつき、2014 年 6 月）では、「情報社会に生きる私たち」という見出しのもと、4 ページにわたって（184 頁～187 頁）、情報モラルについて記されている。

184 頁では、情報機器を「パソコン」「携帯電話・スマートフォン」「ゲーム機・タブレットなど」の三つに分けて、どのように使用するものかが簡単に説明されている。

185 頁は、小学校 6 年生への調査結果（文部科学省「平成 25 年度全国学力・学習状況調査（小学校）」）が示されている。具体的には、「普段（月～金曜日）、1 日当たりどれくらいの時間、インターネット（携帯電話やスマートフォンを使う場合も

含む)をしますか。」の質問については、「全くしない」が38.6%、「1時間より少ない」が37.3%、「1時間以上、2時間より少ない」が12.7%などの回答割合となっており、「携帯電話やスマートフォンで通話やメールをしていますか。」という質問については、「持っていない」が55.6%、「時々している」が19.8%、「ほぼ毎日している」が13.3%などの回答割合となっており、「普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲームを含む)をしますか。」という質問については、「1時間より少ない」が31.6%、「1時間以上、2時間より少ない」が24.8%、「全くしない」が15.6%、「2時間以上、3時間より少ない」が13.2%などの回答割合となっている。これらを総合すると、小学校6年生は、携帯電話やスマートフォンといった小型情報機器を半数以上が持っていないこともあり、インターネットを全くしない人も4割近くいるが、2時間までの範囲でテレビゲームをする人は半数以上にのぼる。すなわち、小学校高学年の児童は自分自身の携帯電話やスマートフォンを所有していなくても、何らかの形で情報機器に接している人は多い、ということである。

186頁・187頁の見開き2ページは、「話し合ってみよう インターネットをどのように使えばよいのだろう」という小見出しのもと、以下の4つに分けて説明されている。すなわち、「オンラインゲームなどのやり過ぎ」には「節度をもって」との注意が、「個人情報のあつかい」には「自分でよく考えて」との注意が、「ネット上でのいやがらせ・チェーンメール」には「相手の気持ちを考えて」との注意が、「言葉の使い方・情報機器の使い分け」には「真心が伝わるように」との注意が、それぞれ大きな文字で表記されている。187頁の末尾には「インターネットを使うとき、他に気を付けたいことを話し合ってみましょう。」との一文が記されている。以上を総じて言えば、この2ページは、ゲームのやり過ぎに留意し、メールの送受信には細心の注意を払うよう、注意を促している箇所である。

小学校5・6年生は、個人専用の小型情報機器を所有していなくても、何らかの形でそれらを利用することがあってもおかしくない年代だと捉えたうえで、使用時間や言葉の使い方などに節度をもって利用するよう指導することが必要だと思われる。

五、『私たちの道徳 中学校』

『私たちの道徳 中学校』（著作権所有：文部科学省、廣済堂あかつき、2014年6月）では、情報モラルについてのページが、226頁～229頁の計4ページ設けられている。

226頁・227頁の見開き2ページは、「考えよう情報社会の光と影」という見出しのもと、電子メールでの伝える内容への配慮と、生活習慣の面での節度のあるインターネットの使い方をうたっている。227頁には、内閣府の「青少年のインターネット利用環境実態調査」（平成24年度）の調査結果がグラフで示されている。具体的には、「インターネットにのめりこんで勉強に集中できなかったり、睡眠不足になったりしたことがある（携帯電話・パソコン）」という質問には、高校生20.5%、中学生8.1%、小学生2.8%という結果が示されている。また、中学生の「平日の自宅におけるインターネットの平均的な利用時間（パソコン）」については、「1時間以上2時間未満」27.1%、「30分以上1時間未満」21.7%、「使っていない」16.7%、「30分未満」15.8%などの回答結果が示されている。そして、「家庭でのパソコンの使い方に関するルール」については、「ルールを決めている（計）」が51.2%、「特にルールを決めていない」が46.8%、「わからない」が2.0%となっており、このうち、「ルールを決めている」の主な内訳は、「利用する時間を決めている」が24.9%で最も多く、「守るべき利用マナーを決めている」が16.0%、「利用する場所を決めている」が15.1%、「サイトについて、使用を禁止したり、利用内容を決めている」が9.1%などとなっている。これらの調査結果からは、中学生は自宅でのインターネットの利用が2時間を超えない人たちが8割を超えており、一定のルールのもとで、概ね節度のある利用を心がけていることがわかる。以上から、227頁は、インターネットの節度のある利用をアピールしている1ページである、ということができる。

228頁・229頁の見開き2ページは、「情報社会を生きる一人として絶対にしてはいけないこと」という見出しで、228頁では、インターネット上での誹謗・中傷・いじめ・いやがらせ、他人のアカウントの乗っ取り、不正アクセスなどに言及し、ネット社会では、「法やきまりを守って適正な使い方をしよう」と呼びかけている。

229 頁では、「情報技術を利用した「いじめ」」という小見出しのもと、相手の顔が見えない「ネット上のいじめ」についてとり上げている。「電子メールやインターネット上の掲示板等を利用して、特定の生徒に対する誹謗や中傷が行われる「ネット上のいじめ」は、他のいじめと同様に決して許されるものではない。」とし、こうしたことが起こらないようにするにはどうすればよいかを考えよう、と読者（中学生）へ呼びかけている。同頁には、鈴木佳苗・坂元章「インターネット利用といじめの関係性に関する研究」（平成 23 年）における「「ネット上のいじめ」の被害経験と加害行動経験（中学生）」の調査結果各上位 5 位がグラフで示されている。「ネットいじめの被害経験」の上位 5 位は、「ネット上でからかわれた」1.9%、「だれのものかわからないアドレスから、悪口を送信された」1.5%、「自分だけにメールがこなかった」1.4%、「ネット上に、事実とは異なる自分の情報を書き込まれた」1.0%、「ネット上で、危ない目にあわせると言われた」0.9%となっている。一方、「ネットいじめの加害行動経験」の上位 5 位は、「メール（パソコンや携帯電話）で、同じ学校の人に悪口を送信した」2.5%、「ネット上で、同じ学校の人をからかった」1.8%、「同じ学校の一人にだけメールを送らなかった」1.0%、「ネット上に、同じ学校の人的事实とは異なる情報を書き込んだ」0.5%、「ネット上で、同じ学校の仲間に、「B さん（同じ学校の人）を友だちリストからはずそう」などと呼びかけた」0.4%となっている。

情報モラルに関するページは 229 頁で終わりであるが、実は、230 頁で「あなたの身近に いじめはありますか」というタイトルの次の文章が掲載されている。

「あなたの身近に いじめはありますか／もし あるとしたら／あなたは／いじめを受けている人ですか／いじめをしている人ですか／いじめを止めようとしている人ですか／それとも／いじめとわかっていながら／何もしない人ですか」

これは明らかに 229 頁の「ネットいじめ」からのつながりで、いじめをとりあげている意味を持っている。中学生のいじめは、時に社会問題にもなり、深刻さを増している。学校の実態に応じた道徳教育担当教員の力量が問われるところであるとも言える。

以上、三節にわたって、『わたしたちの道徳 小学校 3・4 年』（全 176 頁）、『私

たちの道徳 小学校5・6年』(全192頁)、『私たちの道徳 中学校』(全240頁)それぞれの情報モラルに関する記述を紹介し、少しであるが私見も述べた。各冊に共通しているのは、情報モラルに割いているページ数がいずれも4ページであることである。これは、各冊の全頁数に比して、情報モラルの取り扱いがあまりにも少ないことを示している。小型情報機器が急速に普及してきた今日、情報モラルは、一つの章を設けて、もっと大きくとりあげてもよいのではなかろうか。

六、高校「倫理」の教科書における情報モラルに関する記述

『中学校学習指導要領解説 道徳編』(著作権所有：文部科学省、日本文教出版、2008年9月)では、「第1章 総説」―「第1節 道徳教育改訂の要点」―「2 道徳教育改訂の趣旨」―「(3) 改善の具体的事項」の(エ)において、高等学校における道徳教育について、次のように記されている。

高等学校においては、高等学校のすべての教育活動を通じて道徳教育が効果的に実践されるようにするため、学校としての指導の重点や方針を明確にし、道徳教育の全体計画の作成を必須化するとともに、各教科や特別活動、総合的な学習の時間がそれぞれの特質を踏まえて担うものについて明確にする。

また、社会の一員としての自己の生き方を探求するなど、生徒が人間としての在り方生き方にかかわる問題について議論し考えたりしてその自覚を一層深めるようにする観点から、中核的な指導場面となる「倫理」や「現代社会」(公民科)、「ホームルーム活動」(特別活動)などについて内容の改善を図る。

これによれば、中学校の道徳教育の延長線上には、高等学校の「倫理」が位置していることが分かる。そこで、「倫理」の教科書で情報モラルがどのように取り扱われているのかを垣間見ることにしたい(「現代社会」や「ホームルーム活動」に関しては、別の機会に検討したい)。

2016年度使用の「倫理」の教科書は、都合7種である。それらを必要に応じ

て見ていこう。実教出版の『高校倫理』（2012年3月検定済）は、「第2編 現代と倫理」―「第2章 現代の諸課題と倫理」―「第5節 高度情報化社会の課題」の「情報社会の倫理」という項で情報倫理が次のように取り上げられている。

情報社会を生きるうえで私たちに必要な倫理（情報倫理）とはどのようなものだろうか。情報社会とは、直接的な人間関係が希薄化する危険性があるだけでなく、人間の主体性が失われる危険性も高い社会である。私たちに求められているのは、大量の情報の中から自分に必要な情報を取捨選択したり、情報の真実性を批判的に吟味したりする能力である。このような能力を情報リテラシーという。情報社会は私たちの生き方をゆたかにする可能性も秘めている一方でさまざまな問題点を抱えている。私たちは情報社会の光と影を十分に理解しなければならない。（198頁）

情報リテラシーは、情報の受け手側が身につけるべき能力であるが、個人レベルの情報リテラシーに基づいて、個人レベルの、また社会で普及させるべき情報倫理が構築される。情報倫理という語は情報モラルと同義であるが、この情報倫理（情報モラル）については、例えば、第一学習社の『高等学校 倫理』（2012年3月検定済）のほうが、やや詳しい。第一学習社の『高等学校 倫理』は、「第5章 現代の諸課題と倫理」に「4 情報社会と倫理課題」という節が設けられ、その中に「2 ネットワーク社会と情報モラル」という見開き2ページにおいて情報モラルが扱われている。その「電子ネットワーク上での人間関係のトラブル」という項には、「通常の対人コミュニケーションにおいては、表情、身振りなどが気持ちを伝える上での重要な要素となっているが、インターネット上のコミュニケーションは、おもに文字でおこなわれる。そのため十分に自分の気持ちを伝えることができず、トラブルが起りやすい。また、インターネット上での匿名による発言は、他人に対して攻撃的になりやすく、感情的な対立へとエスカレートしやすい。私たちは、こうしたインターネット上のコミュニケーションの特徴をよく理解しておく必要がある。そして、相手への思いやりとともに、感情をコントロールする能力が大切である。」（195頁）と記されている。このような注意

喚起ともとれる記述は、実は、他社の教科書にはない特徴である。

その他の教科書、すなわち、清水書院の『高等学校 現代倫理 最新版』(2011年3月検定済)と『高等学校 新倫理 最新版』(2012年3月検定済)、東京書籍の『倫理』(2013年3月検定済)、数研出版の『倫理』(2012年3月検定済)、山川出版社の『現代の倫理』(2012年3月検定済)における情報リテラシー・情報倫理に関する記述は、実教出版の教科書の記述と大同小異であり、引用・紹介は省略する。

「倫理」という教科を通じて、高校生の時点では、特に情報リテラシーについて学ぶことを確認できた。

七、新聞が報じた青少年の情報モラル

筆者は、本務校(東京学芸大学)の「道徳教育の指導法」という講義で、ここ数年の新聞記事を用いて、情報モラルについて考える一環として、小型情報機器の功罪について話をしている。実は、どちらかというと、「功」の話は少なく、「罪」の話のほうが多い。理由は二つある。一つは、新聞は、「功」よりも「罪」のほうを報じる傾向にある、ということである。もう一つは、「功」よりも「罪」からのほうが道徳教育に関する教訓を汲み取りやすい、ということである。そういうわけで、以下は、「功」よりも「罪」のほうに比重がかかる記事の紹介になりそうである。

まずは、「功」。スマートフォンの使用にルールを設けたという話である。例えば、2014年3月に愛知県刈谷市で中学生がスマホを夜9時以降は使用しないというルールが周知されたことをめぐる記事(『産経新聞』2014年5月2日(金)第23面)や、東京都三鷹市が小中学生に小型情報機器を適切に使用させるべく保護者向けに啓発リーフレットを作製した記事(『産経新聞』2015年4月5日(日)第23面)、都教委による「SNS東京ルール」策定に関する記事(『産経新聞』2015年11月27日(金)第27面)などを、筆者は講義で紹介している。これらを紹介する意図は、本稿の第五節でみたような、中学生にはスマホの利用にルールが設けられ、節度のあるスマホの利用がもとめられていることをうったえるためである。

次に、「罪」。これは多岐にわたる。例えば、『産経新聞』2014年8月26日(火)

第24面の「スマホ使用 長いほど成績低く」では、小中学生は、スマホの使用時間が長いほどテストの成績が低いことを報じている。また、『産経新聞』2014年10月12日（日）第24面の「高1 スマホ依存」では、高1の約9割がスマホを所有し、そのうちの半数が休日に3時間以上も使用していることを報じている。高校生のスマホの使用時間については、その後、デジタルアーツ社が2016年1月に10歳～18歳を対象に行なった調査で、スマホを含めた携帯の1日当たりの平均使用時間は、女子高生で5.9時間に上っていることが報じられた（『産経新聞』2016年5月31日（火）第24面）。さらに、世界保健機関（WHO）が、聴力を守るためには、スマホやオーディオ機器での音楽鑑賞を「1日1時間以内」に控えるよう呼びかけたことも報じられ（『産経新聞』2015年3月1日（日）第30面、「スマホで音楽 1日1時間に」）、スマホの使用時間にほぼ比例して就寝する時間が遅くなり、子ども（特に中学生）が寝不足に陥ることも報じられた（『産経新聞』2015年5月2日（土）第22面、「子供の寝不足 スマホが誘発」）。筆者は、これらの記事を1枚のプリントに収めて講義で配布して、最近の青少年のスマホ使用時間の傾向を伝え、適切な使用時間を守ってスマホに依存することのないように、将来の教え子たちに指導するよう受講生（将来の学校教員たち）へ呼びかけている。

さらに、もう一つ「罪」であるが、歩きスマホの問題がある。電気通信事業者協会（TCA）が2015年1月23日（金）までにまとめた歩きスマホの実態調査（2014年12月11日～14日に東京23区・名古屋・大阪・福岡・札幌で600人のスマホ所有者が対象）によると、歩きスマホをしたことのある人は44.8%に上り、10代～20代は6割が歩きスマホが習慣化していることが判明している（『産経新聞』2015年1月24日（土）第24面、「歩きスマホしたことある」44%）。歩きスマホについても、筆者は新聞記事を1枚のプリントに収めて講義で配布し、将来の教え子たちへの指導に役立ててほしい旨を受講生へ呼びかけている。

ごく最近では、「ポケモン GO」に興じて事件・事故を起こす事例も報じられている。こうした事例も、もし頻発するようであれば、講義でとり上げないといけなくなるのかもしれない、と考えている。

八、おわりに

以上、本稿では、小学校・中学校の道德教育における情報モラルの取り扱われ方を中心に、高校「倫理」の教科書における情報倫理の記述や、新聞が報じた青少年の情報モラルについて紹介し、私見を述べた。情報モラルに関しては、道德の副読本（近い将来、教科書になるが）に取り上げられている事例のみを学習するだけでは、不足であることは明確である。特に小型情報機器の進展は日進月歩である。スマホや携帯の使用に関する児童・生徒への学校独自の実態調査の結果や、マスメディアで報じられるニュース・新聞記事などから得られる情報を、教育現場に適切にフィードバックすることが求められよう。

そして、何よりも、情報機器から離れた日常生活のなかで、子どもたちに、他者への思いやりや礼儀作法を身につけさせることのほうが、むしろ重要ではないか、と筆者は考えている。そして、親と子も、大人と子供も、大人同士も、子ども同士も、生身の人間同士、お互いの目を見て顔の表情や相手のしぐさを見て話をするのが、一番の基本である。こうした素地が身に備わってこそ、情報機器の使用に関しても、必ずやモラルが守られると信じるからである。